

経済学研究年報（早大）29号 1989年 6 月

## 19世紀末ラングドック地方における 葡萄酒販売・流通過程の検討（1）

——産地問屋を中心として——

柳

敦

南フランス地中海沿岸のラングドック・ルシヨン（Languedoc-Roussillon）地方の経済は19世紀後半に大きな変貌をとげた。鉄道建設と葡萄の病虫害フィロクセラ（*phylloxéra*）の全国的な流行を契機として、同地方は、その葡萄栽培を安価な卓上葡萄酒生産に特化しながら大きく発展させ、19世紀末にはフランス第一の葡萄酒生産地となったのである。

こうしたラングドック・ルシヨン地方の経済の変容については、19世紀後半の葡萄栽培新技術の導入や経営のあり方の変容を通じて農村構造を解明しようとするベッシュ（Pech）やガヴィニョー（Gavignaud）等の研究<sup>[1]</sup>が既に存在する。しかしながら、こうした従来の研究は、葡萄酒生産面での分析に終始し、葡萄栽培発展の原因を市場の拡大とする反面、生産者と市場とを結び販売・流通過程については極めて表面的にしか扱っていない。当時の葡萄酒販売・流通過程の実態は全く解明されていないのである。

そこで本稿は、ベジエ（Béziers）の葡萄酒産地問屋を対象として、ラングドック地方における葡萄栽培発展の基盤であった葡萄酒商業の構造を解明する手がかりを得ようとするものである。<sup>[2]</sup>具体的には、『エロー県年鑑（*Annuaire de l'Hérault*）』の商工業者一覧に基づき19世紀末ベジエの産地問屋数を分析し、それに関わる問題を検討していく。

## (一)

『エロー県年鑑』は、1818年から毎年発行され、いわゆる電話帳の形で現在も残っている。そこに毎年掲載されている県内各市町村の商工業者一覧（以下、「一覧」とする）によって、我々はペジエの葡萄酒産地問屋の名称を1818年以降、毎年知ることができる。だが、本稿は1872年以降に分析を限りたい。というのも、同年に「一覧」に掲載される産地問屋の基準が拡大されたと考えられるからである。ペジエの葡萄酒産地問屋数は、1871年の「一覧」では17にすぎないが、1872年に76へと突然の増加をみせるのである。このため、1872年前後の産地問屋数を比較するのは適当ではないと考えられる。ただし、「一覧」の掲載基準が拡大されたことは、この時期に葡萄酒産地問屋の重要性が増大したことを意味していよう。

まず、エロー県内葡萄酒生産量の推移と比べながら、「一覧」から得られる葡萄酒産地問屋数の推移を観察しよう（図1）。

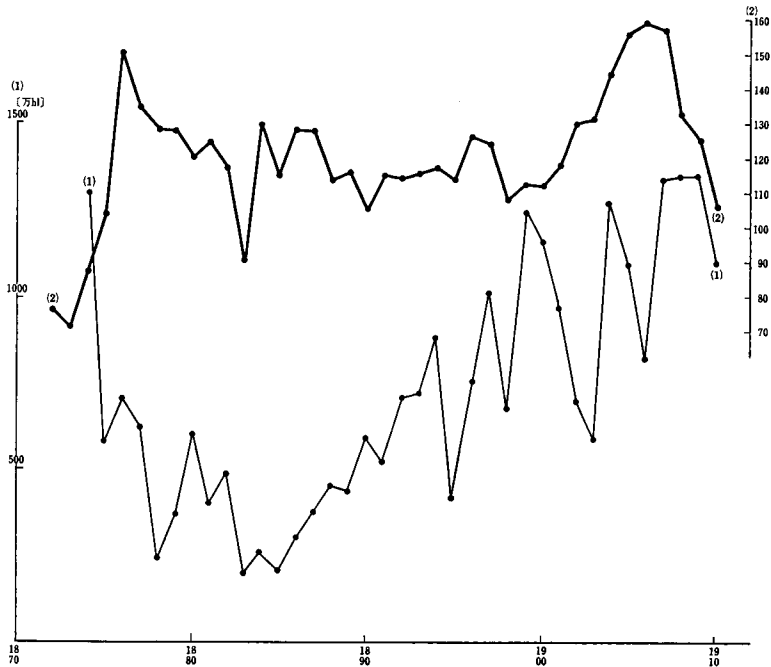
尚、1876年と1883年の問屋数については疑問がある。何らかの理由で、「一覧」の掲載基準が変更されていると思われるからである。

エロー県の場合、既に1860年代末からフィロクセラの被害が報告されているが、<sup>[3]</sup> 県内生産量にその影響をみてとれるのは、1870年代の半ばからである。図1の(1)が示すように、生産量は1880年代の半ばまで減少の一途をたどっていた。同県の葡萄栽培地ではアメリカ産の苗木による植え替えが比較的早く始まり、1880年代半ばに生産量は上向きに転じ、1890年代末にフィロクセラ流行前の水準にほぼ回復した。<sup>[4]</sup>

この時期の産地問屋数に目を転じると、1870年代半ばまで大きく増加した後、増減はあるものの比較的安定した推移をみせていることがわかる。生産量の場合のような大きな変動はみられないのである。

1870年代半ばまでの増加はフィロクセラの流行と関係があろう。エロー県での流行は東から西へと拡がっていったため、エロー県東部が被害を受けていたこ

19世紀末ラングドック地方における葡萄酒販売・流通過程の検討(1) (柳)



- (1) ユーロ県葡萄酒生産量 (Pech, R., op. cit., pp. 499-500 より作成)  
 (2) ベジエの産地問屋数 (Annuaire de l'Hérault, 1872-1910)

図 1

の時期に、ベジエ周辺の県西部の葡萄栽培地の重要性が急激に高まった。<sup>(5)</sup> こうしたベジエ周辺の葡萄酒に対する需要の増加が、ベジエの産地問屋数を急増せしめたのである。

では、こうして増加した産地問屋数が、フィロクセラの流行と葡萄栽培地の再建期にも比較的安定していたのはなぜであろうか。フィロクセラの流行は、国内葡萄酒生産量を激減させ、葡萄酒不足を引き起こし、価格を急騰させた。この葡萄酒不足は、むしろ、産地問屋に対して有利に働いたといえよう。取引された葡萄酒量は限られていたとしても、葡萄酒不足状態の中で産地問屋は大きな利ざやを得ることができたと考えられるからである。他方、再建期には、逆に、取引量の増加によって利ざやの縮少を補いつつ、一定程度の繁栄を得る

ことができたと思われる。

## (二)

19世紀第四四半期全般に亘って、ベジエの産地問屋数は比較的安定した状態にあった。しかしながら、「一覧」をさらに詳しく検討すると、そこに掲載されている産地問屋の移りかわりが激しいことが観察される。

例えば、1880年代の年平均産地問屋数は118であるのに対し、10年間に「一覧」に掲載された産地問屋は218にのぼる。そのうち、ほとんど毎年掲載されている（すなわち、9～10年に亘って掲載されている）産地問屋は55にすぎない。1890年代についても同様で、その数値は、順に、115, 239, 58となる。産地問屋数としては安定していたものの、実際には、葡萄酒商業に新たに参入してくる者とそこから撤退していく者との入れかわりが常にあったのである。

こうした新たな参入者の中には、「一覧」によってその出自を知ることができる産地問屋がしばしば見受けられる。

第一に、葡萄酒に関連した職業からの参入あるいはそうした職業との兼職である。例えば、生産者と産地問屋の仲介をする口入れ屋（*courtier*）である。1879年の「一覧」にはベジエの口入れ屋として31名が掲載されているが、その約40%（12名）は、既に産地問屋として「一覧」に掲載されているか、その後掲載されることになる。こうした例は、葡萄酒蒸留業者（86%）やリキュール製造業者（83%）においても観察される。

第二に、一つの産地問屋が分裂していく場合である。「例えば、ブラダル・エ・デフル（*Pradal et Desfours*）」は、1880年から1894年までこの名称で掲載されているが、1896年から「J・ブラダル」と「J・デフル」とにわかれている。また、1872年に登場する「クリップフェル・エ・クロードン（*Klipffel et Claudon*）」は1874年に「クリップフェル」と「クロードン兄弟」とにわかれ、さらに後者は1875年に「アドルフ・クロードン」、「エミール・クロードン」、「ギュスターヴ・クロードン」にわかれる。

第三に、他の市町村の産地問屋がベジエに事務所を開き、ベジエの葡萄酒取引に参入してくる場合である。例えば、モンペリエ (Montpellier) の産地問屋「バジーユ・エ・レナール (Bazille et Léonhardt)」は、1873—74年と1880—83年にベジエの「一覧」に掲載されている。また、「G・バスティード (Bastide)」はラングドック地方の良質葡萄酒生産地の一つミネルヴォア (Minervois) 地域に位置するエグ・ヴィーヴ (Aigues-Vives) の産地問屋であるが、1872—81年にモンペリエ、1883—88年にセット (Cette)、1880—85年にベジエの「一覧」に掲載されている。

「一覧」から観察されるのはこうした三つのタイプだけであるが、もちろん、この他にも、産地問屋の従業員が独立したり、あるいは全くの素人が葡萄酒商業に参入してきたりしたものと考えられよう。

### (三)

産地問屋数が安定していた以上、新たな参入者と同時にそこから撤退している者もいた。特に注目したいのは、短命に終わる産地問屋が数多く存在していたことである。1880年代を例にとって「一覧」からこの点を検討していこう。

1880年代に始めて「一覧」に登場する産地問屋は95にのぼるが、そのうち45は1880年代に「一覧」から消えていく極めて短命な産地問屋である。また、1870—80年代あるいは1880—90年代にまたがって存在した108の産地問屋の中で37は10年未満の短命なものである。合計すると、1880年代の「一覧」に登場した218の産地問屋のうち82は10年未満のうちに葡萄酒商業から撤退していったのである。すなわち、当時の状況は、新たな参入者が常にいたものの、彼らの中で短命に終わる者も多かったのである。

こうした短命な産地問屋の規模は小さなものと考えられるが、「一覧」には産地問屋の名称と住所しか掲載されておらず、規模を知ることはできない。そこで、以下では、エロー県文書館に残る破産文書から短命な産地問屋の一例を取り出し、その規模に重点を置きながら観察していきたい。<sup>(6)</sup>

ルイ・サルダ (Louis Sarda) は、「1872年、若干22才で、全く経験を持たぬまま」ペジエで産地問屋をひらき、1875年に破産に追い込まれた。1875年のフランス全国の豊作によって葡萄酒価格が大きく下落したために、この産地問屋は設立後約3年で破産したのである。

この産地問屋が葡萄酒取引のために所有していた樽の容量は、その規模を知る手がかりとなろう。破産文書に挙げられている彼の葡萄酒倉の動産をまとめると、以下のようになる。

大樽 (平均105hl)	3 樽
回転式ポンプ	1 台
濾過器	1 台
計量台	1 台
道具類	1 式
ドゥミ・ミュイ (demi-muid): 一部は販売先	500樽
ボルドレーズ (bordelaise): 一部は販売先	100樽

まず注目すべきなのは、葡萄酒倉に据え付けられた貯蔵用大樽の容量が 315hl にすぎないことである。ラングドック地方における葡萄酒販売の場合、葡萄酒は生産者と問屋間の販売契約後も生産者の葡萄酒倉に置かれ、そこから必要に応じて問屋が出荷していくのが通例であった。したがって、産地問屋は大規模な葡萄酒倉を持たなくてもよかった。しかしながら、サルダのもつ貯蔵容量は、破産文書に残る他の産地問屋の場合に比べてかなり小さいものである。

他方、輸送用の樽の総容量も決して大きくない。ドゥミ・ミュイとは、ラングドック地方で一般に用いられていた輸送用樽で、約 550l の容量をもつ。ボルドレーズは、その名が示すように、元来ボルドー地域で用いられていた樽で、その容量は約 225l である。したがって、サルダの所有する輸送用樽の総量は約 3,000hl となる。

ところで、当時の葡萄酒販売では、樽ごと販売する (vente logée) よりも、輸送用の樽は買手によって返送され中に詰められていた葡萄酒だけが販売され

る (vente nue) のが一般的であった。したがって、産地問屋は一つの樽を年に数回利用できた。しかし、樽の詰め替え、馬車輸送、鉄道輸送、買手による樽の詰め替え、空樽の輸送、樽の清掃・整備等によって、実際に同じ樽を次に使えるのは早くても約3ヶ月後である。<sup>(7)</sup> 特に空樽の返送の遅れはしばしばみられるものであった。したがって、サルダの年取引量は、最高で12,000hl(3,000hl × 4回)と推測できよう。

当時のエロー県における産地問屋あたりの年平均取引量を正確に知ることはできないが、あえて概算すると約17,000hlとなる。県内の産地問屋数を20世紀初頭の数値をそのまま利用して561とし、<sup>(8)</sup> 1874—75年の県内平均生産量(約1,000万hl)<sup>(9)</sup>を除したのである。先のサルダの取引量の推計値はこの年平均取引量の数値を下回り、輸送用樽の総容量の点でも、この産地問屋は小規模であったと考えられる。<sup>(10)</sup>

また、葡萄酒の仕入れにあたっては、小口の購入が多い。サルダの債権者関係の文書には、債権者として、28人の葡萄栽培者が挙げられているが、そのうちの10人についてサルダへの葡萄酒販売量を知ることができる。最少で58.75hl、最大で379.66hlである。当時の面積あたり平均生産量は約60hl/haであり、これによって換算すると、サルダの仕入れ量は、毎回、栽培面積において約1haから6haにあたるにすぎない。破産文書は一般に欠落が多く、この場合も同様であるが、彼の仕入れが小口を中心としていたことは確かであろう。こうした小口での仕入れは貯蔵樽や輸送樽の容量が限られていたことと密接な関係を持っていよう。

もちろん、彼の仕入れ先が常に1～6haの小経営であったとは言いきれない。生産者がその葡萄酒の一部だけを販売する可能性が十分あるからである。しかし、生産者の側が、小口の販売をいくつも行うよりも、できるだけ大量の葡萄酒を一括して購入する産地問屋を販売先として望んでいたことは十分に考えられる。したがって、サルダの仕入れ先の大半は彼の望む小口の仕入れに最も適していた小経営と考えて良いのではないだろうか。

以上は短命に終わった小産地問屋の一例にすぎないが、当時、こうした小産地問屋が数多く存在していたと考えられる。実際に20世紀初頭の数値であるが、エロー県内の561の産地問屋のうち386は従業員4人以下のいたって小規模な産地問屋だったのである。<sup>111</sup>そして、こうした小産地問屋が短命に終わった産地問屋の大半を占めていたのである。

#### (四)

葡萄酒商業において規模が大きい産地問屋ほど優位にあったことは明らかである。とりわけラングドック地方では、質より量に重点の置かれた安価な卓上葡萄酒の取引が中心であり、なおさらである。では、小産地問屋は、葡萄酒商業に参入し営業を行うにあたっての劣位をいかなる条件によって緩和できたのであろうか。

既に述べたように、産地問屋は決して大規模な貯蔵設備を必要としなかった。購入後も生産者のもつ葡萄酒倉に葡萄酒を貯蔵できたからである。

輸送用樽についても、1880年代半ば以降、フィロクセラ流行期の大量の葡萄酒輸入をきっかけとして、樽の賃貸業者が現われ、数多くの樽を準備する必要もなくなっていた。

小産地問屋は小口による消費者への直接販売を中心としおり、バリカイユール (barricailleur) と呼ばれていた。小口の販売では約225lのバリック (barrique) と呼ばれる樽を使うことが多かったからである。確かに、鉄道運賃の点では、小口の出荷は不利であった。当時、割安な運賃が適用されるのは7,000kg以上、およそドゥミ・ミュイ (約550l) 10樽以上だったのである。<sup>112</sup>しかし、この場合も、出荷先別に小口販売の樽を集め、まとめて発送する業者を利用することができた。

ラングドック地方の農村には、資本家的大葡萄栽培経営と並んで多数の零細、小経営が存在していた。<sup>113</sup>規模の大きい産地問屋が葡萄酒の仕入れにあたって小経営よりも大経営を好んだことは言うまでもない。このため、葡萄酒の仕入



れに関して大小の産地問屋間に競争が生じることは少なかったと考えられよう。先に述べたように、小産地問屋には零細・小経営という仕入れ先が残されていたのである。

また、特に不作年には、収穫直後に購入契約の結ばれた葡萄酒が、その後の価格の上昇の中で、産地問屋間で再販されることもしばしばであった。再販をみこしての葡萄酒購入は極めて投機的ではあるが、小産地問屋が能力以上の取引を行うことを可能にする。産地問屋は、生産者の葡萄酒倉に置いたままの葡萄酒を他の産地問屋に売ることによって、まさに、「机一つで利益を上げることができたのである。」<sup>14)</sup>

こうした条件によって、小産地問屋は葡萄酒商業に比較的容易に参入し、営業を行うことができた。しかしながら、彼らは、規模が小さいために、相場の変動に対して弱く、短命な形で葡萄酒商業から撤退していく者も多かったのである。

## (五)

以上、本稿は、『エロー県年鑑』に掲載された「一覧」の産地問屋の部分进行分析した後、小産地問屋を中心として考察を行ってきた。

19世紀末ラングドック地方における葡萄栽培の発展の基盤にあった産地内葡萄酒商業は、一部の大産地問屋と参入と撤退をくり返す小産地問屋からなっていたのである。

ところで、こうした状況は、20世紀初頭に変化し始めた。

「一覧」によれば、ベジエの産地問屋数は、1900年代半ばまで増加した後、減少していく。産地問屋数の増加については、1902—3年の不作期に葡萄酒商業に参入した者が多かったことによると考えられるが、ここで問題にしたいのは減少局面である。1905年と1908年の間にベジエの産地問屋数は24の減少を示しているが、実際には、1905年の産地問屋のうち53が両年間に「一覧」から消えていった。この53の産地問屋のうち、1905年までの営業年数が5年以内のも

のが31確認される。すなわち、この時期の産地問屋の減少の中心は、短命な小産地問屋だったのである。

この産地問屋の減少の要因は二つ考えられる。一つは、葡萄酒価格の下落である。1900年代には、国内市場への葡萄酒の供給が需要を上回り、葡萄酒価格が大幅に下落した。こうした状況は生産者を大いに苦しめたが、同時に葡萄酒商業をも逼迫させた。市場が供給過剰状態であったために、産地問屋の得られる利ざやも小さくなり、特に、それを量で補うことのできない小産地問屋は苦しい状態に陥ったのである。

もう一つの要因は、大樽付き貨車 (wagon-foudre) の導入である。これは約150hlの大樽を取り付けた貨車で、輸送樽を積載する場合よりも安い運賃で葡萄酒を発送することが可能となった。この貨車の利用は150hlという比較的大口の取引に限られたために、小口の買手を主とする小産地問屋は大きな打撃を受けることとなった。<sup>45)</sup>

こうした要因は1900年代半ば以降、小産地問屋を中心として葡萄酒商業からの撤退を促していった。

とりわけ、大樽付き貨車の導入はその後の葡萄酒商業のあり方を大きくかえていった。小産地問屋は競争力を奪われ、産地内での葡萄酒商業は徐々に大産地問屋へと集中していった。こうした動きは、葡萄酒生産面において、小生産者による醸造協同組合 (cave coopérative) の設立を促していった。こうして、19世紀末に多数存在した小産地問屋は20世紀初頭から衰退の道をたどっていったのである。

注(1) Pech, R., *Entreprise viticole et capitalisme en Languedoc-Roussillon : du phylloxéra aux crises de mévente*, Toulouse, 1975. Gaignaud, G., *Propriétaires-viticulteurs en Roussillon : structures-coujonctures-société (XVIII-XXs)*, Paris, 1983.

(2) 当時のエロー県における葡萄酒商業中心地は、モンペリエ (Montpellier), セット (Cette), ペジエの三都市であった。港湾都市セットでの葡萄酒商業は他の二都市とは異なる点があるが、それについては別の機会に論じるつもりである。

- (3) Stevenson, I., "La vigne américaine, rayonnement et importance dans la viticulture héraultaise au XIX<sup>e</sup> siècle," *Economie et Société en Languedoc-Roussillon de 1789 à nos jours*, Montpellier, 1978.
- (4) フィロクセラの流行とその対策については, 例えば, Augé-Laribé, M., *Le problème agraire du socialisme: la vitiwlture industrielle du Midi de la France*, Paris, 1907 に詳しい。
- (5) Stevenson, I., *op. cit.*, p. 73.
- (6) Archives Departementales de l'Hérault, 2-U-47, Tribunal de Commerce de Béziers, n° 178 bis.
- (7) 筆者はモンベリエの葡萄酒生産者団体コトー・デュ・ラングドック(Coteaux du Languedoc)の文書室にて, 19世紀末の一産地問屋の500ページに渡る請求書の写しをみつけた。この産地問屋の場合, 同じ樽が再び利用されるのは早くて3ヶ月後である。
- (8) Bousquet, A., *Le régime économigue du vin: le marché des vins*, Thèse de droit, Paris, 1904, p. 127.
- (9) 図1参照。
- (10) 当時は後述するような樽の賃貸は行なわれていなかった。したがって, 彼の所有する輸送樽が彼の取引能力を示す。
- (11) Bousquet, *Ibid.*
- (12) Bourdiol, G., *Le transport des vins par wagons-foudres*, Montpellier, 1910, p. 111.
- (13) この点については, Pech 前掲書に詳しい。
- (14) ベジエ近郊カペスタン (Capestang) の葡萄栽培者タスタヴィ (Tastavy) 氏とのインタビューより。
- (15) Bourdiol, *op. cit.*, pp. 111-112.

1989. 3. 31 提出  
(研究生)